

あ い さ つ

金沢大学教育学部附属養護学校

校長 大塚 明 敏

近年、教育界において教育改革が何かと大きな話題となっております。養護学校の教育におきましても昭和54年の義務制を境にして、この十年余りは学校の増設、教職員増など教育行政の面では拡大期であったと思います。それも一段落した現在では学校への飽和感さえみられるようになってきております。養護学校には対象児であれば誰でも入学できますし、また保護者も子どもの就学については自由に選べる時代になってきております。こういった社会的背景の中で養護学校教育も「量から質」へ視点を転換していかなければならない時期にきていると思います。従って現場における教育研究の方法も教育内容の選択枠組の研究から、子どもたちに何を育てるか、つまり子どもの変容に目をむけた研究が重要視されるようになってきております。

本校では「発達と障害に応じた指導」という研究テーマを取り上げ4年目になります。このテーマの意味するものを要約すれば、子どもの発達や障害に応じて「一人ひとりの人格の調和的発達をうながしその子らしく精いっぱい生きる力を育てる」という教育目標そのものをキャッチフレーズ化したものであります。そのためには障害にだけ目をむけるのではなくて、できるだけ子どもたちに豊かな学習経験を与える必要があるのではないかと考えております。子ども一人ひとりが持っている潜在能力を可能な限り引き出しそれを育てることが大切であります。私たち現場の教育研究は日々の教育実践に根差し教育実践を方向づける研究をしなければなりません。その意味では学校という組織で行う教育研究の方法それ自体が研究であると考えております。

本年度は「授業づくり」「からだづくり」「コミュニケーション」「性の指導」「読みきかせ」の5つの研究グループに分かれて研究を進めて参りました。4年間継続して研究してきたグループもありますし、今年度新しい視点から再検討したグループもあります。とりわけ今回の研究は「子どもの気づきを大切に」というサブテーマのもとに各グループがそれぞれの立場から研究して参りました。「気づき」という言葉は一般的にはまだ十分こなれた言葉ではありませんが、英語でいえば awareness という言葉になろうかと思えます。子どもにはその子なりのすばらしい感性があります。見たり、聞いたり、さわったり、からだを動かしながら時には知的に時には感覚的にいろんなことを気づき感じながら育てております。そのことに目をむけて子どもの感じる心をより豊かにそして子どもの思いを大切にしながら日々の実践をしていかなければならないと思っております。先生方の忌憚のないご意見やご指導をよろしくお願いいたします。